

学習困難児の授業参加と学習集団づくりに関する研究

小学校に勤務する4名の教師へのインタビュー調査を通して
 ○小里 直通 新井 英靖
 (茨城大学大学院教育学研究科) (茨城大学教育学部)
 KEY WORDS: インクルーシブ教育 学習困難児 学習集団

1. 目的

全ての児童が授業に参加するためには、授業を視覚化・構造化するのみならず、表情やつぶやき、行動といった児童の反応を学習集団に取り入れることが必要である。

本研究では、教師がどのように学習集団づくりをしているのかを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

(1) 研究対象者

A 市立 B 小学校に、研究協力の依頼をした。研究の趣旨を説明し、同意が得られた4名の教師を対象とした。対象者の研究当時の概要は、以下の通りである。

対象者	性別	教師歴	担任学級
教師 A	女性	8 年	第 2 学年
教師 B	女性	13 年	第 4 学年
教師 C	女性	28 年	第 6 学年
教師 D	女性	33 年	自閉症・情緒特別支援学級

(2) データ収集方法

A 市立 B 小学校において、8月・1月・3月の3回、半構造化面接によりインタビュー調査を実施した。インタビュー調査の内容は、ボイスレコーダーに録音している。

(3) 分析方法

インタビュー調査から得られた内容を逐語化した。できあがった逐語録をもとに、実際の会話を引用しながら、文章としてまとめ、論考していった。

3. 結果

(1) 授業に生かす児童の「声」

教師 B は「耳をダンボにして、拾い上げながら発問づくりをしていく感じ」、教師 C は「つぶやきをどう拾うかで、広がりが出る」と述べているように、児童の発した「声」を授業に生かすように意識することで、学習集団として学びを深めていた。

また、教師 D は「私自身も教材のなかに入り込んでいて、子どもたちの関係のなかで、つぶやきを拾えたのかな」と述べているように、教師も児童と一緒に教材を味わいながら児童の「声」を拾い上げていた。

一方で、教師 A が「ねらいとか自分は何を教えたくて子どもの言葉を拾おうとしているのかをもって…中略…それだと思ったものだけをこっちで発信する」と言っているように、取り上げる「声」も取捨選択をすることによって、授業の進行に妨げとならないような配慮もされていた。

(2) 授業に生かす児童の「行動」

教師 A の「誰々さんも線引いていたよね、一緒だね」、教師 B の「イラストで描いておくだけでも、このときはこんなこと言ったんだとか…中略…言葉で書ききれない子がいますよね。」といった発言から見て取れるように、言葉としては表出できない児童は絵で描いたり、線で引いたりしたものを教師が代弁し、授業に生かすことで、学習集団への参加を促進していた。

さらに、普段、授業に参加できない児童が参加したときに、教師 C が「縄跳びの神様です、君は」と声をかけた

述べているように、学習困難児の存在そのものを授業に生かす教師もいた。

そして、教師 D は「一緒に子どもと泥を触って」と述べているように、共に活動を進めながら、「キュウリの葉っぱチクチクしてたよね」と実体験を授業に生かしていた。

(3) 児童を認める教師の「声かけ」

教師 C は「今もクラスに支援学級の子いますけど、歴史が得意だったりするから、そういうのを取り上げる」と述べているように学習困難児の得意分野を認めていたり、「目立たないんだけどちゃんとしている子とか、前には出ないけど、…中略…みんなの前でピックアップしたりとか」と教師 A が述べるように、一人ひとりの児童が認められるような「声かけ」を教師がしていた。

そうすることで、「子どもの言葉を拾って、そばに寄り添っていく」（教師 D）と述べているように、一人ひとりを受けとめるとともに、「みんなに知ってもらえたという…中略…ことでセルフエスティームをちょこっと高められたらなああっていうのはあります。」（教師 B）というように、学習集団の質を高めることができると考える。

(4) 間違っても大丈夫という雰囲気「学習集団」

児童の「声」や「行動」といった反応が出るためには、教師 C が「できない子は分かりませんって言える雰囲気がこの学級経営だと思いますから。」と述べているように、教室は間違ふところであり、学習困難児も含めてみんなが居やすい学習集団を作ることが必要である。

すなわち、教師 B は、「間違ふって言っちゃったりとか、ボコってやっちゃったりとか、絶対あるけれども、…中略…傷つくことは全くないよ。みんな、練習しているんだよ」と話し、教室はみんなで成長し合うところであるというよう意識を全ての児童がもてるような声かけをしていた。教師 A も「いいも悪いも受け容れられる仲間づくり」を目指していた。

この点については、特別支援学級担任の教師 D も同様であった。たとえば、学習困難児に対して「出すときに『またおいでね、待ってるよ、こっちで待ってるよ』っていうオーラを山ほど出して背中を押してあげる」ことで、交流学級での学習に意欲をもたせるとともに、特別支援学級が安心・安全の場所となるように心がけていた。

4. 考察

全ての児童が授業に参加できるようにしたいという意識をもち、児童の反応を大切にしながら授業に誘っていくことによって、学習困難児も授業に参加できるような学習集団づくりができるということが本研究から明らかになった。

また、児童の反応を丁寧に扱うことは、児童の自己肯定感の向上にも寄与するものであると考えた。

5. 文献

- ・吉本均 (1995) 『思考し問答する学習集団：訓育的教授の理論 (増補版)』。明治図書、80-85。

(KOSATO Naomichi, ARAI Hideyasu)